

引きこもりたい。

ラズ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ルフィに妹がいたら…という設定。

あの待遇をメンタル普通の人を受けていたら色々性格に難がでそう、と書いて書き始めました。

# 目次

Prologue	1
名前を覚えるのは苦手だ。	4
自己紹介は苦手だ。	8
本を読むのは好きだ。	12
うるさいのは嫌いだ。	16
キツイ人間が苦手だ。	20
裁縫は好きだ。	25
事実を認めない人は面倒。	29
意思のしつかりした人には憧れる。	35
新しい知識は嬉しい。	39
隠れて色々するのは得意。	43
海軍は、本当に無理。	49
Episode 1	53

## Prologue

コビーがふと視線を上げると、茶色いものが視界に入った。こき使われすぎて、変なものでも見えたのかと思ったが、それは縄で繋がれた二つの樽だった。

その樽はゆっくりとこちらまで漂って来て、そして砂浜に乗り上げた。

樽からくぐもった声が聞こえる。

「…着いたの？」

「うわっっ!!!」

「お兄ちゃん？何をびっくりして…」

突然樽が静かになった。

「？中に人がいる訳じゃあるまいし…。」

コビーは興味本意で近付くと、その樽をしげしげと眺める。

彼は首を傾げながら、軽く握りこぶしをつくり樽を叩いてみた。

コン。

「ヒイツ」

ド　ン　ツ　!!

「どうしたレネー!!」

コビーが驚いてそちらに目をやると、麦わら帽子の少年が樽の残骸を纏って立っていた。

髪と目はどちらも黒く、目の下の傷が印象的だ。

彼はコテンと首を傾げた。

「…ん？何だお前？」

「あなたこそ何でそんなところに入ってたんですか!!」

「ん？レネーが樽の中は落ち着くって言うから入ったら、気付いたら寝てた。」

コビーはあっけらかんと言いつつ麦わら帽子の少年から、もう一つの樽に視線を移した。

怯えの混じった声もれる。

「寝る時は起こしてって私、言ったよね？あああ後その人間、ととり

あえず1mばかり離れてください。」

「大丈夫そうだとレネー。こいつ弱そうだし。」

「あ、本当だ。ありがとうお兄ちゃん。」

「よわ…まあ、否定はしませんけど…。」

「つーかお前、何してたんだ?」

彼はその言葉で自分の立場というものを思い出した。

「コビーです…。うわ、そうだと早く戻らないとアルビダ様に!!!」

「誰だ?」

「知らないんですか!?海賊ですよ海賊!!」

「え?海賊版?...海賊版?...つまり私は存在自体が許可されていないと暗に告げられて...「なあお前、何か食うモン持ってないか?」...」

ぶつぶつと呪詛の様に言葉を紡ぐ樽を無視して少年はコビーに問い掛けた。

「え、良いんですかほつといて。まあ…。森の中に入ればあると思いますけど。」

「そうか。レネー、ここに居ろよ。食べば治る!!!」

そう樽に声を掛けると、少年はまっしぐらに森へ入って行った。

入れ代わる様にドストドスと大きな音を起して男達がやって来る。

「おいコビー!!何やってんだ!!」

「いや、その、樽が。」

コビーは口ごもった。何と説明すれば良いか分からない。

「樽う?」

そこで初めて樽の存在に気付いた彼らは、コビーから樽に視線を移した。

「…中身は入ってるのか?」

「まあ、入っているといえに入っているのですが、その。」

要領を得ないコビーに、男は凄みを利かせる。

「…コビー、お前はここで何も見なかった、良いな?」

その言葉の真意を汲み取り、コビーは慌てた。

「ええっ!?でもそんなことしたらアルビダ様に怒られちゃいますよう。」

「分かってンな？」

「は…はい勿論！ぼ、僕は何も見てません！えへへ…」

「おいてめえら。」

「ああ。」

彼らは頷きあうと樽を担ぎ、歩き出す。

気付かれたくないならここで飲めば良いのに、なんて少し考えてああ、コップも何も無いのかと一人で納得。つまるところ現実逃避をしつつ仕事を怠けていると思われたら堪ったものではないので、コビーは慌てて彼らの後を追いかけた。

「れえぬええええええええ!!!」

少年がバンツ、と扉を開けて入って来たのと、彼らが小屋に着いたのはほぼ同時だった。

「ん？増えてる。誰だお前ら。」

「てめエが誰だ!!」

「俺か？俺はルフィ、海賊王になる男だ！」

胸を張って答えた少年…ルフィを、彼らは嘲笑した。

ルフィはむっとして言い返そうとしたが、怒声に掻き消される。

「煩いよあんた達!!」

小屋が破壊され、現れたのは件の女海賊アルビダだった。

名前を覚えるのは苦手だ。

どうしよう…。

寝起きで知らない人間に会ってしまい、気付けば運ばれ部屋の中。このままだと私、ワインじゃないからって怒られてしまうかも。

私能力者じゃないし、液体にはなれないよ…。

そもそも悪魔の実で液体ってあるのかな？

そんなことをつらつらと考えていると、私を呼ぶ兄の声が聞こえた。

そして衝撃が私を襲い、視界が一気に明るくなる。どうやら樽ごと吹っ飛ばされたみたいだ。衝撃に耐えられなかったらしく、樽は半壊している。

この樽（部屋）結構気に入ってたんだけどなあ…。

無くなったものがないか確認する為、一番大きな布に散らばった私物を包んでいく。

一番大事な丸い小さな絨毯を回収し、胸を撫で下ろす。

「あの…大丈夫ですか？ケガは？」

「わっ、人間!!」

私ったら絨毯に気を取られ過ぎていたみたい。

私は隠れる場所もないので慌てて距離をとった。

「だだだ大丈夫ですので近付かないで下さい。」

「わ、わかりました。…それより僕なんかに敬語使わないで下さい。」  
「…どうしよう、これは」お前なんか敬語使われたって逆に不愉快なんだよ」という意味なのか、”お前の敬語が下手過ぎてムカつくので普通に話せ”と言っているのか…。

この人間が私に精神的な害をなすタイプの人間か知る必要がある。

「ここは何処？」

「この海岸は海賊”金棒のアルビダ”様の休息地です。僕はその海賊船の雑用係、コビーといえます。」

あ、大丈夫そう。相槌だけ打っておく。

…って金棒？もしかしてさつき私の部屋壊したの、その人間の武器じゃ？

よし、倒そう。部屋作り直すの地味に面倒なんだからな!!  
あと兄もそちらにいる気がするし。

私は荷物を纏めた布を背負うと、さつきの場所を目指して歩き出した。

「そっちはアルビダ様の船ですよ!!」

だから何だと言うのだろう。私は首を傾げた。

「…。僕と同じっぽかったからもう少し話せるかと思ったのに…。」

彼は私が突然態度を変えた事を悲しく思っているようだ。

でも、私達には絶対的な強さの差がある。

「コピーさんだって相手が強いかわいかわいかで態度を変えるでしょう?。お兄ちゃんみたいにはいかないよ。」

「コビーです。」

人間は名前を訂正すると、暫く考え込んでいた。

「…レネーさんはどうして樽の中にいたんですか?」

「私、あなたに名乗った?」

私はこの人間への警戒心を高めた。というか話題変えてまで私なんかと話して、何が楽しいんだろう。

「え、名乗ってませんけどルフィーさんが言ってたので。」

「…そう。」

「ルフィーさんは海賊王になるって言ってましたけど、あれって本気なんですか?」

「勿論。」

即答した私に、人間はポカーンと口を開けて大袈裟にリアクションをとった。

「…海賊王っていうのはこの世の全てを手に入れた者の称号ですよ!!?つまり富と名声と力の”ひとつなぎの大秘宝”…あの『ワンピース』を目指すって事ですよ!!!」

一人でエキサイトしないで欲しい、煩いし。

「レネーさんだってルフィーさんについて行ったら危ないじゃないです



か。死にますよ!!ムリです絶対無理!」

流石にムツときた。隣を歩いていたら人間を軽く殴り飛ばす。流石に本気で殴ったら死んじやうから、軽くだ。

「何するんですか!!?.....まあいいですけど.....慣れてるから...」

返答しない私に、人間は一人で納得した。

へらへらした笑い方が気持ち悪い。同族嫌悪かもしれない。

とりあえず、これだけは言いたい。

「死んでも自分のやりたいことやったんだから、本望だよ。」

「し...死んでも、良い...!!?」

人間が足を止めたので、私も止まる。

正直そろそろ知らない人間とサシでいるのも辛くなってきたので早く兄の元へ行きたい。

「文句は受け付けない。兄の夢を叶えるのが私の夢だから。」

人間はポロポロと泣き出した。そんなに強く殴ってはいないと思うけど...。私と同じで慣れるまで殴られていたなら、全然問題ない範囲の筈。

「僕も...僕も死ぬ気なら...海軍に入れるでしょうか?」

「かかかかかかいぐぐぐぐ!!?」

私は全力で木の影に隠れた。たそがれモードの人間は私の行動に気付いていないようだ。

「そうですね、僕なんか海軍に入るなんて...でも小さい頃からの夢なんです!!!」

「い、いや別にそれを否定してる訳ではなくてですね。」

「海軍に入ったらレネーさん達とは敵対することになりますけど...。」

「あああ、お願いだから、か、その名前を二度と言わないで下さいお願いします。」

「船だつてここから逃げ出す為に二年間かけて作ったんですよ!!!今まで勇気が無くてできなかつたけど海ぐ「お願いだからその言葉を口にしないで!!!」」

数年ぶりに大声を出した。喉が痛い。

「え、レネーさん海g...睨まないで下さいごめんなさい。レネーさん

政府嫌いなんですか？やっぱり、海賊だから？」

「そういう訳じゃないけど…。」

説明すると疲れるのでそういうことにしておこう。

その時、向かう先から破壊音が聞こえた。

人の叫び声もだ。

「!!…いい、今の音なんでしょう？」

「ついてくる？アヒルって人間がいるんでしょう？あれ？アヒルって人間じゃないじゃん。」

「アルビダです!!」

そういえばお兄ちゃん、ご飯獲ってくるって言ってたけどどうなったんだろ？

「アルビダさ…いや、アルビダに言ってやりたいことがあるんです。僕もいきます!!」

向かった先には完全にのびた猿山のボスっぽい人間が転がっていた。

一緒に来た人間は立ちすくんだまま動かない。

ごめんね人間、君の一世一代の覚悟が無駄になったよ。兄は悪くないので私が（心の中で）謝っておこう。

「おうレネー、遅かったな。船貰ったぞ。」

あらお兄ちゃんたら素敵。

自己紹介は苦手だ。

なんでも兄はロロロロとかいう海賊狩りに間違えられたらしい。

私の苗字のモンキーだってちよつと酷いかなあつて思ったことあるけれど、ロロロロは無いと思う。舌噛みそう。

コピー氏を海軍基地があるシエルズタウンに送り届けるついでに、その人間のことも見に行くのだそうだ。

鬼だ魔獣だとか言われているらしいけれど、魔獣なら別に平気だから心配はしていない。

船は狭いので、シエルズタウンに着くまで私は乗らずに泳いで着いていこうとすら思っていたのだけれど兄が真ん中に入つてコピーと会話をしてくれましたので私は黙つて樽を改造していられた。

お兄ちゃん万歳。

後、なんか男の子同士の友情っぽいものが築かれていたけど私は興味ない。

さて、船は私の希望で余り目立たない位置に着岸させた。

海軍とか制服みただけで殴りそうだし本当に無理。

彼らの一部には本当に罪がないことも、ちゃんと分かつてるんだけどね…。

「お兄ちゃん、沢山食べたいだろうから、明日までなら私一人で大丈夫だよ。その間に食料調達しとくけれど、牛とか豚は食べたかったら自分で買ってね。後、航海術の指南書も余裕があったら買ってきてね。」  
兄にお金の詰まった袋を差し出し…少し考えてから腰に結び付ける。

「無くさないでね?」

「おう。コピー、メシ行くぞ!!!」

兄がコピーを連行して町へ向かったのを見て、私は深くため息を付いた。

「大分、慣れて来たつもりだったんだけどなあ…。」

思わず口からこぼれる一言。

私は物心付いた頃には既に、人間とまともに話す事ができなくなつ

ていた。

他人と関わる機会の増える海賊になろうと思ったのも、数少ないまともに話せる人間である兄と離れるのが怖かった事と海兵にさせられるのが嫌だったというのが主な原因である。

つまるところ、私は兄に寄生しているのだ。

：いけない、こんなことばかり考えていると更に鬱になつてしまう。

私は船をしつかり固定できているか確認した後、早速狩りをするこ  
とにした。

樽から出て準備運動を終えると、銚と網を持って海辺を歩く。

兄が能力者になったのはかなり昔なので、私はずっと魚介類担当だ。魚人と比べれば見劣りもするが、泳ぎにはそこそこ自信がある。

：魚人って魚介類食べるのかな？

それはそうと、銚を持ってきたけれどこの辺は貝の方が捕れそう  
だ。

浅瀬：というか磯？

まあ、港からは少し離れているからね。私達の船ならともかく、大  
きな船は侵入の方向が絞られる地形だ。

だから海軍基地があるのかなあ。

そんなことをうだうだと考えつつ樽が一つ埋まった頃、兄の気配を  
感じた。

私は昔から何と無く兄の居場所が分かるのだ。双子だからなのか  
もしれないが聞いたことがないので真相は分からない。

「…もう帰って来たんだ。」

私は立ち上がり、縄を解く。

近付いて行くと兄の近くに誰かいるのが見えた。

兄が連れて来る以上悪い人ではないのだろうが、取り敢えず様子を  
窺おうと樽の中に入る。

コビーに別れを告げ（私は告げてないけどね）、何故か海兵に見送ら  
れ（何したのお兄ちゃん!?）、港から少し離れると、兄は私に話し掛け

てきた。

「レネー、ちゃんと肉買ってきたぞ。」

嬉しそうな笑みを浮かべる兄に、私の表情も緩んだ。

「誰に話し掛けてんだお前。」

怪訝そうな緑の人に、兄は端的に妹と告げた。

しかし、マリモミみたいな頭だなあ。なんでただでさえ緑髪なのにその髪型をチョイスしてしまったんだろう…。

「妹お？何処に居んだよ。」

此処は勇気を出して自己紹介しないと!!

いつやるの？今でしょ!!

「えと、妹のレネーです。」

「樽が喋った!!!」

皆さんそういう反応なさるんですね…。

私は久しぶりに長く話そうと、深呼吸した。

「私は残念ながら人間です。樽からの挨拶をお許し下さい。怖いものベスト3は祖父、風船、人間です。得に風船は見たら気絶します。面倒な人間だと自負しておりますが、今後どうしても会話の必要性が生まれた時など「レネー、大丈夫だから。」…お兄、ちゃん。…よろしくお願いします。」

私は樽の中で更に小さくなった。

「…取り敢えず風船があったら壊せば良いんだな？」

なんて良い人なのだろう。さつきマリモって思っでごめんなさい。

私は樽の窓から彼を見る。この樽の改造項目の一つだ。まあ小さな小さな隙間にガラスをはめたただけだけれど。

…不思議と、目があった気がした。

「風船の始末は是非私の視界に入る前によりしくお願いします。お名前をうかがってもよろしいですか？」

「ゾロだ。」

「ゾロさんですか。」

分かりやすい名前で良かった。名前を間違えて殴られたくない。

「レネー、ゾロは呼び捨てでも怒らねえぞ？なあゾロ。」

「ああ。」

「え…あ…う…ゾロ。」

「あ？なんだよ。」

機嫌…悪い？今のどう考えても怒っていた様な…私ったらお兄ちゃんに言われたからとはいえ人様のこと呼び捨てにしてみました上に機嫌を損ねさせてしまったのではしかも”ああ”って生返事だったんじゃないってことは許可なく呼び捨てにいやまさかそんな恐ろしいことがががが。

沈黙してしまった樽。

会ってまだ少ししか経っていないが、ゾロなりにルフィの性格を分かったつもりだったので、樽の中の妹に対する態度が意外だった。

案外この男は面倒見が良いらしい。

「…ま、よろしくな。」

「は、はいごめんなさい。」

先は長そうである。

本を読むのは好きだ。

「さつきより寒いから多分今ここだ!!」

「そうなの？針路ずれてるじゃん!!じゃあ、えっと、右を強く漕げば良いんだよね…。」

指南書と地図と、睨めっこする兄と私。

ゾロさんはやる気がないらしく、私は樽から出て船を操作せざるをえなくなつた。すぐく居心地が悪いのだがまあ慣れるしかあるまい。

この本はぶつつけ本番でやって数日前にあらぬ場所に行つてしまったばかりなので、これは不味いと思ひ兄に買ってきてもらったものだ。

そういえばシエルズタウンまでは迷わなかつた。案外コ…あーえっと彼は役に立つ奴だったらしい。

「お前ら、それでどうやって海賊やってたんだよ。」

「だって俺達漂流してたし。」

「政府にはまだ海賊と認知すらされていないと思ひます。」

旗も掲げてないし、民間人から略奪行為した訳でもないし…多分。

「マジで!!!」

兄は驚き方が大袈裟なので、顎が外れないか妹は心配です。

そういえば町で何してたのかまだ聞いてないや。

「お兄ちゃん、ちゃんと町では自分は海賊だつて言わなかつたんだよね?」

兄は思いつ切り視線を逸らした。

ゾロさんも驚いてこちらを見ている。これは堂々と宣言したな?

「言っちゃったんだね…。」

無用の混乱を避ける為に言わないで欲しいとあれ程説明したのに…。

まあ、どつちにしろ海賊旗あげるまでの話だけだよ。

レネーは指南書をパタリと閉じると、ルフィに向き直った。

「海賊って言うത്ピースメインとモーガニアがあるって話は前したよね？」

「ああ、良い奴と悪い奴だろ？」

ゾロにとつてあまり馴染みのない言葉だったが、そういうものかと思つて話に耳を傾ける。

短い付き合いだがここで変に口を挟むと、このルフィの妹は途端に黙つてしまうと分かつていた。

「お兄ちゃんがなりたい海賊つてのは、ピースメインなんだよね？」

ルフィは勿論、という様に大きく頷いた。

「でも海賊つて自称するつてことは、どっちととられてもおかしくないんだよ？ エースにいやシヤンクスさんみたいなのは一部なんだし、寧ろ悪い奴つて自称しているようなものなの、分かる？」

「海賊は悪い奴じゃねえ!!!」

「だーかーらー、人間にだつて良いのと悪いのがいるんでしょ？ 私はあんまり良い人間つてのに会つたことないけど…とにかく!!海賊つていうもの一般的な認識は悪い人間なの!!」

「お、おう、そうか」

ゾロでも分かる、ルフィは絶対分かつていない。妹に押され気味なだけだ。

「仲良くなれば分かつてもらえるのは同じだけど、余計な面倒ごとが起きるの面倒くさいでしょ、何で分かんないかなあ…。例えば貴族は嫌な奴多かつたけど、サボには…あ、ごめん。」

どうやら彼らにとつてサボという名前は鬼門らしい。ルフィの妹は顔を俯かせた。

「分かつた、ピースメインつて言う。」

「う、うん…。…つあ!!ゾロさんごめんなさい。」

「いや、別に構わねエけどよ。」

そこで、ふと疑問に思つたのかルフィが問い掛けた。

「なあレネー、ゾロは男だぞ、さんはおかしくねエか？」

「おかしくねエと」そ、そうなの!!?でも本に”偉そうな人間には様、そ



うでない人間にはさんを付けましょう” って書いてあったよ!!!  
「何の本だよ!!」

レネーはビクツと身をすくませた。ただの突っ込みでもびっくりしてしまふことがあるようだ。

「哺乳類と交流しよう!の中級編です。どうしよう、さんじやなかったら何を付けければ良いの!?!あつちにいた頃は全員階級で呼んでたからなあ…ええと、何か役職持つてませんか?」

「特にねエよ。別にただゾロって呼べば良いだろ?」

「わ、分かった、頑張ります…。…宣言した以上、今度は呼び捨てにしないとコイツなんのつもりだよって思われて…。…ブツブツ」

こうなると、暫くどうしようもないのである。

「…肉食いてエ。」

ぽつりと兄が言った。

「えっお兄ちゃんお肉ならまだあるよ?」

私が干し肉の入った樽を指差すと、兄は眉尻を下げた。

「干し肉飽きた。」

「そつかあ…鳥でも飛んでればなあ…。」

空を見上げれば、ちょうど船の上を飛んでいる鳥がいた。噂をすればなんとやらだ。

「おっ、デカい鳥。」

「ホントだく。」

「あの鳥食おう!!俺が捕まえて来る!」

兄がマストに手を掛ける。

「どうやって…ってまさか!!?!止めて!!私が撃ち落とすからちよつと待って海に落ちたらどうす「ゴムゴムの…ロケット!!」ってお兄ちやああああああん!!!」

兄は鳥にくわえられてしまった。あ、ヤバい咳が止まらない。久々の大声は堪える。



うるさいのは嫌いだ。

「おい!!その武器を捨てりや溺れねエだろうが!!」

「ゲツ、バレた!!?」

「なんでだ???」

あ、バレたとか言っちゃうんだ。

ゾロにあの人達武器隠し持つてるよって言ったら、思い入れのあるものだったらどうするんだって返された。

そういえばこの人剣士なんだよね…なんて思いつつ、でも海水に浸けっぱってどう考えても武器を大切にしてないよねって言ったらさっきの台詞を言ってくれた。私がこれ以上声張り上げてたら声帯が死ぬ。

のど飴欲しい。

「ばれちまったら仕方ない…かかれ!!」

「オラア!!!」

目つぶし的に海水をかけられ、急接近。ゾロも私も別に能力者ではないので普通に対応する。

あれ、一人いないと思ったら潜ったのか…でも、丸見え。この辺の海はきれいだって忘れてるよねこの人間達。

浮上地点に足を振り下ろす。

鈍い音がして人間が沈んでいくのを、腕を掴んでひっぱり上げた。

振り返れば、二人の人間がボロボロで土下座していた。

「あなたが”海賊狩りのゾロ”さんとはつゆ知らず…申し訳ありませんでした!!!」

「てめエらのお陰で仲間を見失っちゃまっただろうが。」

あれ、やっぱり男の人にも”さん”付けて良いんじゃないや…。って海賊狩り!!!ロロロロってゾロだったの!!!

…重ねてお詫び申し上げます。

地図で一番近い島を確認。オレンジの町というらしい。

「あの、此処に行ける?」

「はいいつつ!! 勿論ですウ!!」

さつき蹴った人間が敬礼する。敬礼って嫌なモノ思い出すから止めて欲しい。

「お前、戦えたんだな。そこそこ強い癖に何でそんな弱そうなんだよ」  
「えっと、まあ色々あって…」

「で、お前ら何でこんなところで追いはぎなんてしてたんだ?」

「別に結果的に追いはぎになっただけで、騙されたんですよ!!!」

「しかもけっこう可愛い女に!!!」

いや、可愛いとかどうでも良いし。

「おれ達ア海賊”道化のバギー”様の一味のモンなんですがね。商船を襲った帰りのことでした…」

偉そうな人に様付けてる!! やっぱりの本はあってたんだよ、きつと!!!

でも今戻したらあア!?! とか言われそう…。

そして人間達は、騙された経緯を語った。

なんでも、そこそ良い宝が手に入り舞い上がっていたところ、船に倒れている女性を見つけたらしい。

宝箱と引き換えに助けに来てくれというので船に全員で乗り込んだら船ごと盗まれ、しかも直後にスクールに襲われ船は大破したとか…。

その女性の言動から察するに、そこまで”計画通り”だったらしい。

「って次第なんですよ!」

「一人くらい船に残ってれば良かったのに…。」

「天候まで操るのか…海を知り尽くしてるなその女。航海士になってくれねエかな。」

え、増えるの…。

私は慌てて尋ねた。

「ゾロも一人旅してたんだよね!!!」

「まあな。俺の場合は、ある男を探しにとりあえず海へ出たら自分の村へも帰れなくなっちまったんだ。」

それって…。

「迷子ですかイ？」

「あア!?」

「な、何でもありません!!!」

「そ、それよりあいつを草の根をわけてでも探し出さないと!!!」

「いや問題は宝だ、このまま帰ったらバギー船長に…!!!」

二人が話をそらした。いや、無理矢理過ぎじゃ…。でもゾロは気にしていないみたい。

「…っつかよ、バギーってのは誰なんだ？」

「”道化のバギー”を知らねエんで?”悪魔の実シリーズ”のある実を食った男で、恐ろしい人なんだ!!!」

「具体的にどう恐ろしいの？」

「船長はバラバラの実を食べたら「コラっ!!何船長の能力バラしてんだ!!」」

止めるのが遅いよ。

バラバラの実ってことは体がバラバラに…っってことは!ゾロと相性悪いんじゃない?。

「(ゾロ、バラバラってことは体を切ってもまたくっつくと思う。刀で戦うと不利だよ)」

「(そりや面白エな…)」

まじか。

「つきやしたぜ!!!」

隣に思いつきり海賊船。少なくともこの前の海賊船よりは大きい。ピエロみみたいな海賊旗だ。

結局良い解決方法を思いつかなかつたらしい三人がもめているのが良く聞こえる。ってあれ、静か過ぎない??

「人気がねエな…。」

同じことを思ったらしく、ゾロがぼつりと言った。

人間いないとか私に優しすぎる。

「実はこの町、我々バギー一味が襲撃中でして…」

ん？ってことはピエロマークの海賊旗はバラバラの人をイメージしてるの??

普段から化粧してるとか???

うわー肌荒れしそう。

「じゃあそのバギーってのに会わせてくれ、ルフィの情報が聞けるかも知れねエ。」

キツい人間が苦手だ。

帰りたい、でもゾロが方向音痴だから帰れない…。

悶々としながら喧噪の起きている方へ歩いて行けば、今にも後ろから切り捨てられそうな女性を発見。

ゾロが助けに行った。剣の腹を利用して投げ飛ばす。

「ゾロオ!!!」

聞き覚えのある声にそちらを見れば、兄 in 鉄の檻。

…何やってんの。

「オイ、今ゾロって言わなかったか?」

「間違いねエ、海賊狩りだ…。」

ゾロは有名だったらしい。みんなが気をとられている。

今の内にと私は急いで兄の檻に向かった。

うーん、壊そうと思えば壊せるけど、こっちに気付かれたら不味いよね…。

「レ (静かに!!)」

「(もつとこつち寄って)」

ナイフで縄を切る。

バラバラの人が切られたのを横目で見ながら、鍵穴を確認。

歯が二つしかない。これなら開けられる。でも、今はそれどころじゃない。

戦闘の方は、案の定バラバラの人の体がくっ付いた。言っついて良かった。

…ってか服もくつつくってどういうこと!!!?

「あいつバケモンかっ!!」

「それ、お兄ちゃんが言っちやうの…?」

しかし…なんというか、顔がうるさいなああの人間。あの鼻どうなっているんだろう、激しい動きをすると自重で付け根が痛んだりしないのかな。歳とつたらたれてきて口に当たりそう。

剣を持った手が縦横無尽に飛んでいる。

今のところ弾いているけど、これは歩が悪いなあ…。

あ、あの大砲良さげ。

「お兄ちゃん、あれって弾入ってる？」

「入ってるぞ。」

よし。マッチは持ってる。

「私が合図したら、ゾロを呼んでね。」

私は大砲を持ち、ひっくり返した。こんな猛獣に比べたらそこまで重くない。

大砲の影に隠れて、兄にGOサインを送った。

「ゾロオーオー！！！！」

「うわっ！！？大砲が！！！」

「いつの間に！！！」

呼びかけに応じてゾロがこちらに転がり込んできたのを確認し、点火する。

ちゃっかり例の女性が他の海賊を盾にしているのが見えた。

「あれにはまだ、特製バギー玉が入ったままだぞ！！よせ！！」

え、どんだけ好きなの自分の鼻。

私達は爆発に乗じて逃げ出した。

「この辺で良いか…。」

さっきの場所から大分離れたので一旦止まる。二人でとはいえ、檻を持ったまま移動するのはかさ張るし面倒だ。

私は細い金属を鍵穴に差し込んだ。

「そうだレネー！さっき航海士に誘おうと思ってる海賊嫌いな奴に会ってな、ちゃんとピースメインだって言ったけど分からなかったぞ？」

「え、浸透してないのかなあ…。てか海賊嫌いな人にどうして海賊だって言っちゃったの！？しかも誘ったの！！？」

「だって俺海賊だし。」

まあ、お兄ちゃんってそーいう人だよね…よし、開いた。



「ありがとな!!…っーかゾロ、お前ソレ大丈夫か?」

兄の言葉に振り返れば、ゾロは太ももから血を流していた。

服が黒くて目立たないし、兄のことで手一杯だったとはいえ気が付かず走らせてしまった。

私は慌てて駆け寄った。

「ゾロ、ごめん気付かなくて!!!そのケガいつ負ったの!!!」

「さつきそっちに飛び込んだ時にやられた。…大したことねエよ。」

あの時か!!飛んでる剣を無視してこっちに飛び込んだんだ、私の所為だ…。

「ごめん!!!」

「お前の所為じゃねエよ。」

「で、でも…「ワン!!」えっ!!」

え、何でこんな所に犬が…。もしかしてこの辺もう町の人間がいるの??

一度吠えたきり動かない犬。よく見ればところどころ傷を負っている。

とりあえず逃げよう。

「どこ行くんだよっ!!!」

「この犬は飼い犬っぽい。この辺人間いそう、OK?」

「いやOKじゃねえし!!!」

「ゾロは絶対お兄ちゃんとはぐれないでね。」

返事を聞く前に屋根の上に逃げた。人間いなさそうなら消毒液とか色々取って来よう。

「あんた達、こんな道端で何やってんの。バギーに見つかっちゃうわよ?」

危機一発。さつきの女性だ。私は屋根の上で身を伏せた。

「よオ航海士。お前こそ何でここに?」

「誰が航海士よ!!!…一応お礼をしにきただけ、必要なかったみたいだけれどね。」

そう言つて女性は鍵を投げ捨てた。あの人航海士になるのはも

う確定なのだろうか…？

どんな人なんだろう。

「盗ってきてくれたのか。お前やっぱ良いヤツだな!!」

女性は嘆息した。普通良い人と言われてため息はつかないと思うんだけど…。

「アンタね…、私が言えた話じゃないけど、騙された相手に良い奴って言う??」

え、お兄ちゃんのこと騙したの？まあお兄ちゃん騙され易そうだけど。

三人はそのままそこで会話を始めた。ここじゃ見つかるって言ったのあの人だよね…？

話を聞く限り、あの女性——航海士候補の人が兄が檻に入っていた原因らしい。既に好感度がマイナスだ。

しかも話し方がめっちゃキツイ、暫く話しかけるのは無理だろうな…。

あ、犬が鍵を飲み込んだ。…あれ喉につつかかったりしないのかしら。

もう一人、服装が派手なおじさんが近づいてきている。

そろそろ行こ。

道具を色々盗んでいたら、さつき兄がいた辺りから煙が上がっているのが見えた。

町民の暴動？じゃないか。お兄ちゃん達と鼻の人の海賊団が遭遇したのかな。

…ものすごく行くの面倒臭い。

でも行かないとなあ。行かないや駄目かなあ。

もうケガとか大丈夫だよきつと、ゾロ普通に歩いてたし。例の大砲もお兄ちゃんなら跳ね返せるし。

…そうだ!!!今殆どの船員ってあっちにいるだろうから、何か盗って

来よう!!!それでチャラ!!!

そして、再び町の人間にお礼を言われて旅立つお兄ちゃんでした。

裁縫は好きだ。

吉報!!!

例の女性ーナミさんとは手を組んだだけらしい。しかも船が別なので私のことを認識してもいないようだ。できればこのままでいたい。

先の戦いで穴のあいたシャンクスさんの帽子を繕っていると、兄が島が見えたと言いつ出した。

寄るつもりらしい。

「ごめんまだ途中、後でちゃんと直すっ!!」

手だけ樽から出して、兄に帽子を渡す。

船室からナミさんが出てきた。

「今、女の子の声がしなかった?」

「き、キコエナカッタゾ。」

兄は動揺を隠すように帽子を高速でツンツンした。

また穴あくから止めて!!!

「ってアンタその帽子!!何で直ってるのよ、帽子までビックリ人間の仲間入り!?!」

「さ、さあな。ナンデダローナ。」

兄はゾロに視線で助けを求めた。

分かり易すぎるよ…。

「…別に、男が裁縫できてカッコ悪いとは思わないから安心なさい。大事な帽子なんでしょ?」

良かったああ…、別の意味でとってくれた。

「おう!!俺の宝だ!!!という訳であの島に行くぞ!!」

「どういう訳よ!!しかもあの島無人島よ、行くだけ無駄…って待て!!!」  
「仲間になつてくれる奴いるかなー」

え、つまり人間以外の動物を勧誘???

こちらナミさんが降り立ったのを確認、ドーゾ。  
ゾロが寝ています、ドーゾ。

そろそろ私もコツソリ降りて魚でも獲ろうかと思えます、ドーゾ。  
「おいゾロ、降りて来いよー」

…つて危なっ、ナミさんこつち向いた。

寝かしといてあげなさいとか言ってる、好感度が—273度から—  
272度上がった。

「コケコッコー!!」

なんか変なのいるし。鶏かと思ったら見た目が狐だった。

鳥類なの？ほ乳類なの??

兄たちを素通りしてこつちに来る。

こつちくんな

…あれ食べれるのかなあ。鶏よりなら食べれるのかなあ？

狐って臭いから昔は香草使って無理矢理食べたけど、別に今は何も  
食べるものがない訳じゃないし…。

やっぱいいや。

誰も見ていないのでなるべく音を立てずに潜ってみることにした。

…!!?

猫が海の底の岩に張り付いてる。謎生物は陸だけではないらしい。

…動かない。

一度浮上して息を吸い、そこへ行ってみた。

そつと触れてみると、固い感触……それこそ貝類のような。

味が分からないので獲るのは止めることにした。猫臭いただの貝  
とかだつたら最悪だし。

因みに猫も食べたことある身としては、猫は可愛さに能力値を全て  
振り切った結果臭みが出たんだと信じてる。

「…も箱…詰まった……は初めて見たよ、箱入り息子なのか？」

「ああ、小さな頃から大切に育てられて…つてアホかお前!!」

浮上したら兄が足の生えたブロッコリーと会話していた。え、どう  
いう状況？

あのブロッコリーもこの島特有の生物なのかな??…おっ、白菜っぱ  
い海藻だ。食べてみよう。

「嵌っちまったんだよ、抜けねえんだ!!20年もこのままだ!!お前ら  
にこの切なさ解るか!?!」

解りません。でもあなたが人間ってことは分かりました。

「え!!?あんた20年もこの島にいるの!!?」

「馬鹿みてえ。」

「ぶっ殺すぞテメェ!!!」

でも兄の言う通りだよ、箱なんか壊せば良いのに。あの人そこま  
で臭わないし…トイレはいけてるってことは、突き出てる足の間も空  
いてるんだろうし…。

兄がブロッコリーの口を掴んで引っ張って怒られてる。汚いから  
後で手洗ってって言っところ。

本人はミラクルフィットとか言ってるけれど、あれ下からなら出れ  
るんじゃないかなあ。

…嫌なもの見そうだから絶対手伝わないけど。

「宝探しにや命掛けても惜しくねえよな!!お前らも何か地図を持って  
るのか?」

話がいつの間にか進んでいた。あの人間も海賊だったらしい。

”偉大なる航路”の地図なら持つてるぞ!!俺は”ワンピース”を目  
指すんだ。」

「な、なに!!?まさか、本気で入るつもりか!?!…で、どれが”偉大なる  
航路”だ?」

ブロッコリーは兄が広げて見せた海図を覗いた。興味津々だなあ。

「さあ……わかんねえけど。たわしのおっさんは知らねえのか?」

「俺は海図なんてさっぱりだ!」

「なんだそうか!!」

たわしかあ、なかなか的を得てますな。汚れつきその意味で。

「海賊同士でする会話じゃないわ…。」

それには同意かな、人のこと言えないけれど。  
ナミさんがなんか説明を始めた。

曰く、この世界には海が二つあり、それを区切っているのが”赤い土の大地”、それに垂直な航路が”偉大なる航路”。  
流石にそれは知っている、私は航海図が読めないだけだ!!!（どーん

「世界一周旅行ってことか。」

…兄は知らなかったらしい。え、目指してるんだよね??  
とりあえず結論：“偉大なる航路”は危険って話らしい。

ブロッコリーは森の奥の宝箱に未練があるそうだ。

二人を連れて行ってしまった。

…戻ってくるまでに体拭いところ。

ブロッコリーが勧誘された。兄が誘う人だから大丈夫という自信が崩れそうだよ…。

まあ、ゾロは良い人だったけどさあ。

因みに、白菜っぽい海藻は長時間茹でた白菜にぬめりを加えたかんじで激マズだった。

事実を認めない人は面倒。

一本道の他は岩と木々のみで、開拓されていない印象を受ける風景が広がっている。

この大陸にある村でまともな船を調達することになった。ナミさんの提案である。

”偉大なる航路”を越えるのにこの船じゃあんまりだとか。そりやそうだ。

でもこんな発展してなさそうな村で手に入るのか疑問なんだけど…。

奥の方にこつちを見ている人々がいるので、まだ樽からは出ない。「ところで、さつきから気になってたんだが…あいつら何だ？」

「見付かったー！ー！ー！！」

ゾロの声で、三人の子供が蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。取り残された鼻の長い人間が怒っている。随分お粗末な舎弟だ。

そしてたらりと冷や汗を流した。

「…俺はこの村に君臨する大海賊団を率いるウソツプ!!8000万の部下は俺を称えキャプテンウソツプと呼ぶ!!」

「ウソでしょ。」

「ゲツばれた!!」

自分は偵察で見習いの面倒を見ている…とかならまだ分かるけどさあ、それはないよ。

「ほらバレたって言った。」

「バレたって言っちゃまった!?おのれ策士め!!」

のたうちまわる鼻の人を見て、兄が爆笑している。

「お前、面白エなあ!!」

ヤバい、仲間になるフラグが立った。

でも船調達すれば隠れるスペース増えるから問題なくなるよね!!よし、いける!!

「俺をバカにするな!!その誇りの高さ故に、人は俺を”ホコリのウソツプ”と呼ぶ!!」



埃？可哀想に…。

兄たちは鼻の人に案内されて村へ向かうようだ。  
見る限り一本道だし、後から私も行こうかな。

夕方にさしかかる頃、民家が見えてきた。

兄はまだ帰って来ないので、恐らく何かに巻き込まれたんだろうと思う。

こんな村にただ長居する訳はないだろうし…。暇なので私も動くことにしたのだ。

話しかけられても困るので、私はフードを被って怪しい人ですアピールをしている。怪しい人アピールしていると基本村人は話しかけて来ないので安心だ。

フードの内側にはナイフや小さい敷物なんかも入れているので、そこそこ重い。

そのまま道を進んで行くと三人の子供がたむろしていた。あの舎弟たちだ。

うわ、こつち向いた。走ってくる。

逃げてても良いけれど子供の声って響くから、叫ばれたらマズいよなあ…。

「おいお前!!!」

「怪しい奴だな!!!」

「何者だ!!?」

平和ボケしてるなあ…私がこのくらいの年齢の時って、今思えばかなり殺伐としていたからちよつと憎い。

完全な逆恨みだけど、見ていてイライラする。

「あなたたちのボスは一緒ではないのですか?」

「キャプテン?」

「ホラ吹きのか?」

あ、判断基準そこなんだ。

「キャプテンは今日もうそをつきに行ったんだけど…。」

「でも今日のは正直なかつたよなあ…。」

「うん、ケイベツした。」

「でも、ちよつとキャプテン変だつたよね?」

「おれもそう思った。」

彼らは口々に内心を吐露した。あの鼻の人は何かやらかしたらしい。

「嘘をつきに行く、とは?」

「キャプテンはね、毎日屋敷に行つて、外に出られない女の子のためにうそをついてるんだよ。」

「え、何も知らない子に嘘吹き込んで遊んでる…。」

「「違うよ!!!」」

怒られた。

彼らは言いたいだけ言うと自宅に帰つて行つた。

鼻の人は屋敷にいるお嬢様…カヤさんというらしい。その人にセラピー紛いのことをやっているそうだ。

普段から嘘をつきまくっているが、今日は初めて人を傷つける嘘を言つたとか…。

嘘つて普通、多少の罪悪感を伴うと思うんだけどなあ。

彼が自分の嘘で傷つかないとしても、むしろ今まで誰も傷つかないかつたのが奇跡だつたんじゃ…?」

まあ私の持論はさておき、セラピーやってるなら仲間にもならないだろうし、船もこんなところにあるとは思えない。

少し散策をしてから帰ろう。

そう思つて歩いていたら、後ろ向きに歩く人間が前方に現れた。二度見した。

…面倒そうだからスルーしようとして、そのまますれ違う。

「オイお前。」

声掛けてきたよちくしよー。  
振り返ってやつと顔の全貌を知る。  
サングラスが真っ赤なハート型だった。顎から縞模様の何かが突き出てた。

ないわー。てかカッコいいと思ってやってるのかなコレ。  
というかそれもしかして顎の一部？

「怪しい奴だな、何者だ？」

「え、あなたに言われたくないんですけれど。」

ヤバツ、思わず本音が。

「バカを言え。俺はただの通りすがりの催眠術師だ。ちっとも怪しくねえ。と、さつきも言ったんだが。」

いや十分怪しいから。後さつきついていつだ。

「とりあえず普通の人は後ろ向きに歩かないと思いますよ、それじゃ。」

「待て。」

さつきと別れようとしたのに引き止められた。

「こつちにも色々と計画があるんだ、支障がでちゃあマズいからな。

お前は何しにこの村に来た？」

「…特に何も。」

「妙な船が泊まってるって情報が入ってる、関係は？」

「知りません。」

あーあ、こりや私達の船見つかったなあ。

兄達が彼らを見つける前にこの村から出て行く可能性も否めない。

まあ、特に大事な物は全部持つてるから、荒らされても船さえあればどうにでもなるか。

すぐに換金できるものも一応持っているし…。

あ、でもナミさんは大金を船に置きっぱなしだったなあ…。

「本当かあ!？」

「知りませんってば!!!私はこの村の親戚に会いに来ただけなので、そちらの事情なんか知りませんよ。」

「さつき用はないって言っただろうが!!!」

「あなたは怪しい人に話しかけられたら会話を長引かせるなって習わなかったんですか!!!?」

「習った!!!」

「習ったんかいっ!?…じゃあそういうことです、それじゃ!!!」

親戚を訪ねて来たと言った手前海の方へは行けないので、民家のあ  
る方へ走り出す。

「って待て!!俺は怪しくねえ!!!」

「…船長が言ってたのはアイツか?」

「間違いないな。」

「ああ、あのフードだ。」

…あるえ、なんか聞こえるんだけど。

「めっちゃ素早いらしいぞ。船長追いつけなかったって。」

「馬鹿、戦略的撤退と言え!!船長に聞かれたらどうする!!」

「え、船長はもうあつちで出航準備をしているんだよな?」

「万が一の話だよ!!!アイツ倒したら朝の上陸にあわせて合流するぞ。」

「おう。」

彼らは明らかに私を狙っている。

全力で逃げたのが仇となったようだ。足が早いだけのモブとは思  
わなかったらしい。

暗くなってきたのでさっさと倒したい。

…あの三人だけだし、良いよね。

私は地面を蹴った。

月歩、私が兄の前では使う事の無い技の一つ。

「つてあれ、アイツは!!!」

「消えたぞ!!!」

「どこだ!!!」

標的から目を離すなって習わなかったのかしら。

私は一人に蹴りを入れそのまま踏み台にした。

近い方の男の胸を強打し、昏倒させる。

敵はすぐ一人になった。

一般の船員がこの程度なら、船長も兄たちが倒せるな、多分。

しかし不確定要素に三人か…

敵はずいぶん慎重な奴らしい。

私は報告されることを避けるため、持っていた紐で三人を縛った。

意思のしつかりした人には憧れる。

お屋敷潜入なう。

兄は鼻の人と行動を共にしていたから、屋敷には行ったはず。そう思つて見に行つたところ、あまりにも人間がおらず潜入が簡単だったので入ることにした。

てへぺろ（真顔）

さつきから使用人すら見かけない。

…と思つたら、血だまりに執事服着た人間が。

「クラハドール？」

扉を開けて、オジョーサマっぽい人間が入つて来た。

うわー最悪、これ完璧私の犯行じゃん。

「メリーツツ!!!」

カヤさんと思われる人間は、駆け寄つて執事を抱き起こした。

「あなたが殺したの!!!この人殺し!!!」

キツと私を睨みつけたカヤさんに、なんと言おうか悩む。

陰口じゃない言葉の暴力は久しぶりだから、どうしたら良いかわからない。

下手に主張しても激昂されるだけだろうし…。

均衡を破つたのは、執事の吐血だった。

「お、お嬢様…無事で…。」

「あの人にやられたんでしょ!?メリー…」

息も絶え絶えな執事に、カヤさんの方は今にも泣きそうだ。

「あの、人…?クラハドールがまだ此処に!!!」

「クラハドールですつて!?!」

いや、誰だよ。

「ええ…アイツは、海賊です!!」

「じゃ、じゃあ…ウソツプさんが言つてたことは…私、彼になんてことを…。」

彼女はハツと顔を上げた。

「…あなたは何者なの?」

一般市民と言おうとして、自分が侵入中だと気付く。

「えっと、その、強いて言えばそのクララボールさんとは全く関係ない者です。」

「あなたも海賊!？」

「まあ、一応…。それよりその人、はやく治療しないと死にますよ?」

「つつ、誰か!!」

そこで人を呼ぼうとするあたり、オジヨーサマなんだろうなあ…。

「無駄です…屋敷の者は全員昨日から休暇をとっています。「じゃ、じゃあ…」取り乱してはいけません!!」

執事は無理矢理起き上がると、壁へ這って行って寄りかかった。

因みに私は頑張って気配を消しています。いたたまれない。

「まだ事件は起こっていません…あなたが今すべき事をお考えください…。」

医療キット持って来よう。確かそこそこ良いのが奥の部屋にあった。

私はこつそりと部屋を抜け出した。

部屋に戻る時、ちょうどカヤさんが走っていくのが見えた。

すべき事をしに行ったんだろう。

「まだ生きてます?？」

声を掛けると、彼はゆるりと顔を上げた。

私は彼に信用してもらおう意味も込めてフードを脱ぐ。

「…あなた、女性だったんですか。クラハドールとは関係ないと仰っていましたか?？」

私の持っている道具をみて、彼は言葉を詰まらせた。

「あなたは海賊でしょう?あなたに治療を受けるくらいなら、私は死を選びます。」

何この人、変な頭してるくせにカッコいい…。

よし、何がなんでも生き延びさせてやる。

カヤさんがどこぞへ去ってから大分経過した。

まあ十中八九、兄と他の海賊団がいる所だけ。

聞けばまともな船はこの屋敷にしかないそうで、兄はここ戻ってくるだろうと思つて私は勝手に居座っている。

ぶっちゃけ探すの面倒。動きたくないでござる。

私は治療を終えてからの暇つぶしとして、船に自分の部屋を勝手に作るなら何処かについて考えていた。

……用具入れ、は埃っぽそうだからヤダなあ…。

「あの、お仲間の元へ行かないので?」

沈黙に絶えかねたのか、執事が声を掛けて来た。

「何処にいるか今一把握していないもので。」

再びの沈黙。

終わったああ会話終わったよ!!でも私勢いでこの人の治療しただけで、本来なら会話できたのがキセキだよ!!

「海賊とおっしゃっていましたが、麦わら帽子の青年とはご兄妹ですか?」

「そうですけど、え、ご存知で??」

一発で分かるほどは似てないと思うんだけど…流石執事。

「ええ。お兄さんはウソツプさんと一緒においでになりましたよ。」

「うs…ああ、セラピーの人。」

「セラピー…まあ、あなたが間違いはありませんが。彼はお嬢様と自分と重ねてしまつて放っておけなかつたんでしようね。」

「自分と重ねる??」

「はい…」

聞かされたのは彼の過去話。

彼の嘘は、父を乗せた海賊船が村に来て欲しいという思いの現れだとか。

父が居なくなつた直後に、母を失うという心境は私にはよく分からない。



しかし、兄と引き離された時を思い出して少し心が痛んだ。

あの事がなかったらつて今でも思うけれど、あれがなかったら私は兄について行くことを考えもしなかっただろうからなあ…。重荷つてレベルじゃあなくなるもの。

そういえば、なんだか引つかかるんだよな…。

鼻…海賊…、うーん。

「その、父親とやらが今何処にいるのかは…。」

「さあ…死んだという話は聞きませんが、生きてるかというと…。」

「…そうですか。」

「貴女は、どうして海へ出たんですか??」

「うーん、兄に依存してつてのものもあるんですが…。」

彼の求めている答えはそういうことではないだろう。

「意趣返しですかね。」

「意趣返し?!!」

「ええ…私の祖父はか、海軍で。兄が海賊になりたいというから、せめて私だけでもと思ったのか、色々…。…あ、私なんかの身の上話を聞いても面白くもなんともありませんよね…すみません。」

「いえ、そんなことありませんよ。」

再び会話が途切れる。今、私は切実にコミユ力が欲しい。

新しい知識は嬉しい。

「ただ今帰りました…あら？どなたかしら。」

所々擦り傷を追ったカヤさんが帰って来た。

元氣そうな執事の様子に心底ホツとした顔をしつつ、私に問い掛ける。

「えっと、その、先程侵入しました海賊です。…レネーと申します。」

「まあ！では船長さんの妹さんね。メリー、お茶を。」

「…畏まりました。」

先程とは打って変わって、カヤさんは私に親しげだ。

執事の方は何か言いたげだったが、一礼して部屋から出て行く。主人の決定に従うらしい。

彼女は外套を脱ぎ、椅子に体を預けた。

「あの、兄が何か言っていたのですか？」

「私、船をあなた方に譲ろうと思つてその事を船長さんに言つたら、妹が来たら先に船に乗せるようにとこつそり頼まれたの。妹さんがどんな人かはお聞きできず仕舞いだつたけれど、分かつて良かった。」

お兄ちゃん…せめて容姿くらい言おうよ。

私を名乗る別の人がいたらどうするのさ…。

まあ、いないと思うけど。

うやむやになつた私が屋敷に侵入した理由も、兄と合流するためだと解釈したらしく彼女からの追及はなかった。

間違つちやいないけれど無用心過ぎると思う。

私と執事は海賊襲来事件の詳細をカヤさんに聞かされた。

鼻の人の頼みで、事件は村の者には伝えないことにするらしい。

その方が村人の為になるとか。

鼻の人は海賊が来る旨を村人に伝えていたから、彼の言つた事は全て嘘になる。

執事がそのお人好しっぷりに驚いていた。

私は兄が彼を仲間に誘うことを確信した。大丈夫だもん、大きい船あるから隠れるもん…。

カヤさんは兄を案内するそうで、私は執事と一緒に一足先にゴーイングメリー号と邂逅した。

船は詳しくないから良く分からないけれど、船首を飾る羊は中々愛嬌のある顔をしている。

案内しようかと聞かれたのを全力で辞退して、一人で船内を探索。早速、甲板から続くレンガの建物に入ってみる。

椅子がいくつか並んでいて、その奥に…??

これは……………だ、台所だ!!!

ふおおお初めて見た!!!

これが噂に聞く台所!!!女子力が100くらい上がった気がする!!!

凄くテンション上がった。

あつても、コック仲間にしなきゃまともに使える人が…………よし、次行こう次。

今は何も考えたくない。

船内は元々カヤさん達用に作られたため、中々に豪華だ。

バーなんてものまである。

必要そうなものは乗せたと言っていたが、ペンキや絵の具まであったのには驚いた。

どうせ誰も絵を描いたりしないだろうと、絵の具だけ拝借。

粗方探索し終わった頃、デッドスペースに作られた天井が低めの部屋を見付けた。

小さな窓からは穏やかに海が広がっている。

…ここにしよう。まだ時間はある。

私は扉を外しにかかった。カモフラージュは得意中の得意だ。

「おい、レネーは良いのかよ。アイツらから隠れてるっぽいからさつきは言わなかったが…。」

「先に乗ってる、ハズだ!!」

「ハズかよ!!!」

ゾロったらマジ神。兄ならこうはいかない。最近やつと”こつそり”を覚えたけど、言わないなんてあり得ないもの。…まあ、そもそも人前に出ない私が悪いんだけどさあ。

私は壁に耳を付けた。

足音は二つ。他に人はいない。

私はそつと扉を押した。

「うおっ!!!」

「おうレネー、部屋そこにしたのか。噂をすれば風邪だな!!!」

「影だ、アホ。」

狭い部屋に二人を招く。

食堂の椅子を一個持ってきたけれど他には何も無いも同然なので、みんなで床に座った。

因みに端数になった椅子はお誕生日席風に配置してきた。

「二人に言わないでくれてありがとう、平気になったらその内突然現れると思うから引き続き黙っててね。」

「分かったけどよ…お前、また樽で寝る気かア?」

前の住処はまた壊されたので、私は新しい空の樽を部屋に持ってきていた。

ゾロはそれを見咎めて呆れ顔だ。

「駄目?」

「ハンモックがまだあるから一つ持って来る。」

「メシどうすんだ?」

「テキトーに獲るつもりだけど…お前らは私のお母さんか。」

「俺たちの母ちゃん???」

「あ、いや、概念的な話。」

ますます疑問符を浮かべる兄に、使う言葉を間違えたことを悟る。でもなんて表現したら良いのさ。

「まあ良いや。あ、レネー、この船大砲あったぞ。後で撃ってみるけど驚くなよ。」

ニシシと笑う兄にゾロは色々言いたげだったけれど、壊すなよと言っただけだった。

大分兄の生態が分かってきたらしい。

「レネー、大発見だ!!」

兄がハンモックを片手に部屋にやってきた。

発言者的にゾロが来るのかと思っていたけど、ゾロの手を煩わせるのは申し訳ないから良かった。

「どしたの??なんか上が騒がしかったけど…。」

分かっていた大砲二発の後にも、破壊音がしていた。

その後もなんだかバタバタしていたし…。

「なんかゾロの知り合いが来た!!船がちよつと壊れた。」

「早くも!?!」

「でな……………ライム食わねエと死ぬんだ!!!」

「…えつと」

「ナミが言ってたんだ、スゲーだろ!!!」

「あー…あー、うん、凄いね。」

今、初めてナミさんがいて良かったと思った。

隠れて色々するのは得意。

深夜にこっそり風呂に入り、適当に魚介を獲ったり肉を食べたりするのにも慣れて来たある日。

あ、兄の仕業になつている食材消失事件の一部は私ですごめんなさい。

…それは兎も角、とうとう海上レストランとやらに着いた。

時々良い匂いがただよって来る。

目的は勿論コックだけど、普通に働いている人間が頼まれただけで海賊になつたりするのだろうか？

きつと兄のことだから無理矢理にでも料理の上手な人を仲間にしそうでちよつと怖い。

流石にこの、船が横にある状況で海に飛び込んだらバレるので私は暇を持て余していた。

一回くらい一般客っぽく入ってみようかなあ、なんて思いつつ睡眠を取り、目覚めて絵でも描こうかと窓を見たら、船が進んでいた。あれ、もう出発して…：船に兄の気配がない！

私は慌てて廊下に出た。

船室前で足を止め、息を潜めて中を覗く。

オレンジの髪の毛が見えた。

ナミさんだ。

…：やっぱり、裏切った。

彼女が何処に向かっているとか、何で裏切ったかなんて聞かずに、私は彼女の意識を落とした。

その直後だ。

「うあつ!?!」

なんか揺れた。

凄く揺れた。

起きていないかを確認して…：つてあれ、よく見たらこの人間泣いてる？

裏切ったという事実は変わらないが、なんとなく乱雑に扱う気持ち

が薄れてそつと床に下ろした。

甲板に出て原因を探ると、私は自分の目を疑った。

船が真つ二つになって海に沈んで行くのだ。

そりやあ船も揺れる訳だなあと現実逃避しつつ双眼鏡で確認。

肉眼で見えたことから分かってはいたけど、凄く大きい船だ。あそ

こにあったらメリー号もやられてたかも。

海軍の船は無いからあの人達の誰かがやった訳じゃなさそうだけ

ど…この辺にもすごい人がいるんだなあ…。それとも足を伸ばして

イーストブルーまで来ただけかな。

まあ、そこそこ離れた位置にいる今は関係の無い話だ。

あ、そういえば昔兄と集めたガラクタに、錆びたネジがあったなあ

…。

満身創痍だけど元気、というなんとも矛盾した状態でゾロが部屋に入ってきた。

「ゾロ、その怪我は…?」

「殺りあって来た。」

ゾロは凶悪な笑みを浮かべた。

わーそれもしかしなくても船割った人とだよね。

酷い怪我だと思っただけけど、あれをやつてのける人とならむしろその程度の怪我で済んだって言った方が正しいかもしれない。

「楽しかった??」

「…次は、絶対倒す」

「頑張つてね。」

安い言葉かもしれないが、私から言える事は少ない。

しばし雑談していたが、ゾロが思い出したように言った。

「つーかよレネー、ありやお前の仕業か?」

あれと言われて思い当たることはただ一つ。  
あたかも本棚を固定するネジが古くなっていて、揺れによりナミさんに落ちてきたことを装って私の犯行を分からなくしたのだ。

その後乗り込んだ兄達をこっそり窺っていたら、失敗に終わった裏切りの理由をナミさんが説明：：というか弁明していた。

そりやさ、彼女が絶対悪でないことは承知していたけど、ちよつと複雑な気分だ。

一億で村を魚人から買い取る、とのことだが：私だったらその一億で確実にその魚人を倒せそうな人を雇う。

金の上での約束は守る男だそうだが、約束なんて口八丁でどうとでも変えて来るだろうに。

：結局、人間を信じるからいけないのだ。

兄がもう俺たちは仲間だろ的なことを言って全員で何とかパークに向かうことになった。

感情論としては私はナミさんをまだ仲間って思えないけれど、兄が私を頭数に入れてくれているなら客観的には一応仲間なんだよなあ：：。うーん私は彼女と仲間としてやっていけるのだろうか。今のところ無理だ。

私は目下の悩みを誤魔化す為にゾロをちやかした。

「バレた？ゾロは気付かないと思ってた。」

「どういう意味だよそりや!!：：まあ、意識落とされたことは何度もあるしな：：。」

ゾロは遠い目でため息を付いた。

とりあえずテキトーに労つとこう。

「良く分からないけど、お疲れ。」

「：まあ、今回は助かった。」

「ホント?じゃあ私、ずっと自船警備員してる!!!」

「それは止めろ。」

えー…。

「今、寝たり絵を描いたり、したいことしかしてないから凄く楽なんだ



けど。」

「絵?.....なんでルフイはウソップじゃなくてお前に頼まなかったんだ?..?」

ゾロは私の部屋にある描きかけの絵を見て不思議そうに言った。

「何の話?..」

「いや、何でもねエ。お前ら兄妹の似たとこ探す方が難しく思えてきたっただけだ。」

私に悪い所があり過ぎてって話ですね分かります。

アローンパークに行く前に、ナミさんは寄りたいたいところがあるからとココヤシ村に着けた。

兄たちはそのまま本拠地に向かうらしい。正面突破だ。というかナミさん以外作戦を立てる気なんて毛頭なかった。

だって脳筋だもの。

ウソ氏が、なんだかんだ理由を付けてナミさんと一緒に行こうとしてる。

「私もちゃんとそつちに向かうわ。アンタたちが失敗しても.....:..しなくても。それが、私のケジメ。」

「失敗なんかしねエよ!!」

兄は胸を張って答えた。

\* \* \*

結局ウソップ(?)はナミさんと船を降りた。

私は尾行中。あの話が演技だとは思いたくないけれど、理由を詳しく話さずにみんなと別れようとするって、怪しすぎるもの。

「…私は正直、アンタたちと会わなかったことにしてこのまま別れるのが最善だと思ってる。」

「誰も賛成しないと思うぜ。」

「分かってるわよ、そんなの。」

「じゃあなんで言ったんだ？」

「…ただの意思表示よ。てかウソツプ、アンタはアーロンと戦いたくないから降りただけでしょ、付いて来ないで。」

「な、なんでバレたんだ!!!」

ウソツプ（ー）はナミさんの言葉に目を見開いた。

むしろなんでバレないと思っていたの？

「そ、それよりお前、このまままた裏切るつもりじゃねエだろうな？」

「あら、お望みならそうするけど？ルフィと私が仲間だって私からアーロンに伝えたわけじゃないから、アンタらが負けた後に何事もなかったかのようにアーロンから村を買い取ることも私には可能なのよ?。」

ナミさんは挑発的な笑みを浮かべる。

「とにかく、付いて来ないで。」

彼女が向かった先は簡素なお墓だった。

彼女を信用していないのは勿論だが、理詰めで言いくるめるタイプの彼女が突き放すような言い方をするのだ、何かあると思った。

「ベルメールさん…。」

故人と思われる名前を呟くと、ナミさんは膝をつく。

よくある悲劇だ。だから、兄を裏切っていい理由にはならない。

私はそう自分に言い聞かせながらその場を離れた。

海軍は、本当に無理。

「海軍が来たけどやられたってヨ。」

村に戻るとそんな噂が聞こえて来て、私は身をすくませた。

「聞いたよ…魚人に即やられたんだろ？」

「ああ、船に穴開けられてな。」

「それよりゲンさん大丈夫かねえ？」

よかつた…というのはいささか不謹慎であるが、鉢合わせないですんだことにホツとする。

てか瞬殺とかダサ過ぎ。

「無事らしいが…あのギリギリ魚人じゃない奴が逃げてったの、アーロンパークの方だよな？」

「あつ確かに!!あれ死ぬんじゃない？」

「死んだな。」

村人たちは静かに黙祷した。

ギリギリ魚人じゃない奴?…人間離れた顔の人間…ウソツプか

!!!

分かってしまった自分にショックを受けたけれど、分かられちゃったウソツプはもつと可哀想だと思いました、まる。

…まあ、生きているだろう、多分。

どうしよっかなあ、私もあつちに向かった方が良いかしら。

「お前、この先の村の住人か?」

詰問するような口調に振り返ると、複数の海兵がいて…。

気付いたのは相手を地面に引き倒した後だった。

「ぐ、ぐめんなさい。」

ことを大きくしてしまう前にさっさと逃げようと思ったが、少しの

殺気と共に引き止められる。

「その強さ、村人ではないな？何者だ!!」

「えーっと、あの、お互いの為に良くないので私は去りたいのですが。」  
そう声をかけるが聞き入れる様子はなく。

殺気に全く怯まなかったからだと気付いたが後の祭りだ。

武器を取り、私から距離をとった海兵らを掻き分けるようにして、  
一人の男が現れた。

「チチチチチ：私は海軍第16支部大佐、ネズミだ。」

大佐、殺れる範囲。私は手が出そうなのを抑えるので必死だった。

「お前ナミという女が何処にいるか知らないか??」

「：その人がどうしたんですか?」

「盗品を大量に所持しているという情報が入ってな。オレンジの髪らしいが：。」

ニヤニヤと私を下から上まで見て来る。

多分、このタイミングで村人じゃない女が現れたから疑っているの  
だろう。

顔面蹴りたい、キモい。

「オイ。コイツを剥げ。」

今、コイツは何と言った?

剥ぐって、私を??

苦い記憶がフラッシュバックした。

\* \* \*

じわりじわりと海兵たちは包囲網を狭めて行った。

レネーは無表情で海兵の奥にいるネズミを見つめている。

「随分余裕そうじゃないか?」

「：。」

瞬間、ネズミの体が吹き飛んだ。

レネーは彼らを見做して剃でネズミの懐に入り、殴ったのだ。そのことを理解した海兵らに動揺が走る。

「ネズミって名前なだけありますね、とても軽い。」

木に叩き付けられて動かなくなった彼を見て一言。

挑発の言葉が届いたかは定かでないが、うめき声が漏れる。

あつさりと上司がやられたのを見て、海兵の一人がやぶれかぶれに殴り掛かった。

レネーは海兵の手を取り、攻撃を流す。

バランスを崩した彼に背中から一撃。

彼女の足元に転がる人間は二人になった。

「て、抵抗を止めろ!!!」

銃を構える海兵をレネーは鼻で笑う。

「あなたが撃つのと、私がこれを壊すのと、どっちが早いと思いますか?」

背中に乗せた足を、抉るように動かす。

「撃たないんですか?」

首をこてんと傾げる仕草が、酷く恐ろしかった。

海兵たちは弾かれたように走り出した。

\* \* \*

ヤバイ。

何がヤバいって記憶が飛んでいるのだ。

私はいつの間にか船にいた。

そして目の前には我が兄、ルフィ。

兄は持って来た紙の束から一枚取り出し、私に掲げてみせた。

「レネー!!! 到頭、俺、お尋ね者、になったぞ!!!」

「そ、そう。おめでとう。」

満面の笑みの下に3千万ベリーと書かれた、兄の手配書。

いかなる手段をもつてしてもこの悪名高い海賊を捕らえよ、かあ。

この文章は定型文なんだろうけど、ちつとも悪名高そうに見えない写真なのが兄らしくて良い。

「あと、多分これお前！」

ド下手な手描きの手配書を差し出された。

性別すら…つてあ、体型的に女性か。

麦わらの一味の可能性アリ、だつて。

「え、お兄ちゃんの中の私ってこんな感じなの？」

少しショックを受けて問い掛けると、兄はかぶりを振ってから答えた。

「勘!!」

「…そう。」

まあ、可能性は高いだろう。

私がプツンしてたつてことは、恐らく口封じとか生死とか、全く気にせず放置しただろうし。

このタイミングで私が手配されてもおかしくはない。

「他の人はここ見てなんて言ってた？」

「ん？」

但し書きに目を通した兄は、私に無言で手配書を渡した。

「誰も読んでねエ……………と思う。」

「ありがと。…頑張るね。」

「おう。」

## Episode 1

ことはナミがルフィに突然声を掛けられたことから始まる。

「あ、ナミ。」

「何よ、私は忙しいの…ってアンタ何その絵。」

ナミはルフィが片手で抱えていた絵に目を向けた。

「これ、売ったら金になるか？」

ルフィにしては珍しく丁寧に渡された絵は、海が鮮明に描写された美しい絵だった。ナミの目がキラリと光る。明らかに値打ちものだ。

「…そりゃ、まあ。」

「んじや食費に使ってくれ。」

そう言うとルフィはさっさとナミの元から離れて行った。

「まさかアンタが食費気にしてるとは思わなかったわ…ってちよつとルフィ!!これどっから盗ってきたのよ?…待ちなさい!!」

「で?どっから盗って来たの?」

ゾロは甲板でうたた寝をしていたところ、ナミの声で目を覚ました。

視線を上げると、ナミがルフィを詰問している。またつまみ食いでもしたのだろうか?

「そりゃレ…知らねえ、気付いたら手元にあった。」

宙に視線を泳がせるルフィ。

レ…?ゾロの目はナミの持つ絵をとらえた。

…そういうことか。

「何・処・か・ら!?!」

「知らねえ!」

しかしルフィはガンとして譲る気はない様だ。彼女は手元にあった手頃な絵でルフィを叩こうとし…すんで踏み止まった。

「…まあ良いわ。私、他にも用があるし。後できつちり聞かせて貰うからね。」



「あれ、レネーのか？」

去って行くナミの背中を見送ってから、ゾロが声を掛けた。

「おう。レネーに”食費の足しにするか燃やすか海に捨てる”って渡された。」

ゾロはレネーが、ルフィの食費によって胃を痛めていたことを思い出した。

「捨てるとか勿体なさだ過ぎだろ…。」

素人目でもあの絵は価値があると分かる。

「なー、あいつ少しは自信持てば良いのに。」

だよなあ、と同調する。

「俺より頭良いし。」

付け加えられた一言に、ゾロは言葉を詰まらせた。

「…っーかレネーは、やっぱりナミが怖いのか？」

ルフィが途中まで名前を言いかけたのに止めた理由。

ゾロにはそれ以外考えられなかった。

「ああ。海軍にいた時に虐めて来たくれーまー？って奴らと口調が一緒らしいぞ。」

「ほー…ってちよつと待て、レネーが海軍にいたなんて聞いてねえぞ。」

ゾロは、レネーの戦闘を思い出そうとしたが、殆ど戦っていないことに思い至る。確か足で海賊を踏みつけていて、意外と荒事もできるのかなと思っただったか。

「じいちゃんが昔なー、レネーが人怖いって知って、連れてっちまったんだ。帰って来たらあーなっただ。」

「悪化してんじやねえか!!」

「でもその後みんなで頑張っつて治したんだぞ？」

「あれでか？」

思わず不躰な言い方になってしまった。

「おう。前は俺達以外の人間が近付くと、もんどーむよーで殺しにか

かっていた。俺ら兄弟以外全部敵って感じですよ。で、時々振り返りにあつた。」

「その節はご迷惑をおかけしました。」

ぬつと、音もなくレネーが現れる。

「うおっ!?何時から居たんだ。」

「今来た。ゴミ捨て。ちょっと創作意欲が湧いて色々やつたの。」

レネーはおが屑の入ったバケツを掲げた。

「それこそ燃やせば良いんじゃないの?」

「私がゴミと思うものは、人様にとって燃やす価値すらないもの。」

いや、そのりくつはおかしい。

レネーは淡い笑みを浮かべていた。

「レネー、お前暫くメシ食ってねエだろ。」

「は?」

「コイツ食ってねエとこんな感じでいつも更に変になるんだ。」

「あ、お兄ちゃん。ちゃんとナミさんに”食費の足しになるかすら分からないお目汚しなものです。燃やすなりなんなりして活用していただけたら幸いです” って言ってくれた?」

「おう!渡したぞ。」

満面の笑みのルフィに、レネーはつられて微笑んだ。

「そっか。」

ゾロは何かいいかげんにルフィに視線を送った。知らぬが花である。

その夜のことだ。

「なー、なんで俺達だけ呼び出したんだ?ルフィは?」

集められたのはルフィを除くクルー達。

ナミは困ったような顔で切り出した。

「…ルフィって実は、物凄く器用なのかしら?」

三人はそれぞれの理由で固まった。

二人は突拍子もない発言に驚き。

一人は腹筋を鍛えていた。

「ナミさん…それはいくらなんでも…。」

「でもねサンジ君、この絵…ルフィが持つてきたんだけど…入手経路が謎なのよ。しかも本人にいくら聞いても目を逸らしたり口笛吹いたりして知らないって。」

テールブルの真ん中に置かれた絵に視線が集中する。

今は海の真ん中。渡されたのは今日。

ルフィの性格からして、取っておいたものを今更渡したりはしないはず。

「でもアイツ、バラティエで散々皿割ってたぞ？」

「絵の方面には器用かもしれないじゃない？だいたいアイツ、前に自分で麦わら帽子繕ってたし。」

「マジかよ。アイツが？…ナミさんの言葉を疑う訳じゃありませんが…。」

「前に戦闘で穴開いたことがあって…結構大事にしてるみたいだから、繕ってあげようかと思ったら…。」

「既に直ってた？」

「ええ。」

「ゾロは見てないのかよ、直すところ。」

「確か怪我して寝てたわよね？」

「あ、ああ。」

ゾロは視線を虚空にやった。

恐らく、”寝れば治る”という発言を繰り返していたのがナミの印象に残っていたのだろう。

勘違いだが今はありがたい。

「裁縫は…信じたくないがまあ、得意だったとして。絵を描くのはは違うだろ。」

「それもそうね。アイツ野性児っぽいから、服とかも自分で直してたのかも。だってアイツが服屋にいるとこ想像つく？」

満場一致で首を横に振った。

「だいたいじゃあ、海賊旗はどうなるんだよ。」  
「でも芸術家って謎のオブジェとか作るよな？」  
「あの旗に実は芸術的な意味があったと…!？」  
「でもあのルフィが？筆持ってる？」  
「ないな、うん。」  
「この話は、保留となった。」